岡山県道徳教育郷土資料集
（小学校）
授業パッケージ

岡　山　県　教　育　委　員　会
岡　山　市　教　育　委　員　会
岡山県小学校教育研究会道徳部会

平成２９年３月

まえがき

平成二十七年三月に一部改訂された小学校学習指導要領では、「特別の教科　道徳」が新たに位置付けられるとともに、一人一人の児童生徒が、答えが一つでない課題に道徳的に向き合う「考え議論する道徳」へと質的に転換し、道徳教育の充実・強化を図ることが求められています。

岡山県教育委員会及び岡山市教育委員会では、この度、郷土岡山に対する深い理解と愛情を培い、郷土を愛する心豊かな児童を育成するために、道徳教育郷土資料集を刊行することとしました。郷土の偉人や伝統文化等を取り上げた郷土資料は、児童にとって特に身近なものであり、親しみながら、ねらいとする道徳的価値について考えを深めることができると考えております。

各学校においては、本資料集を積極的に活用し、指導方法の一層の工夫改善に取り組むことにより、道徳の授業改善が進むよう期待します。

終わりに、本資料集の作成に当たり御協力いただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成二十九年三月

本書の構成と活用の仕方

一　本書の構成

１　本書は、第１部の「資料」と第２部の「学習指導案」で構成した。

２　「資料」は、岡山県にゆかりのある先人の伝記や逸話、文化や自然などを取り上げている。

３　「学習指導案」には、資料を活用する際、参考となる本時案や板書例、他教科等との関連を示した構想図等を掲載している。

二　本書の活用の仕方

１　資料は、指導する時期や児童の実態等を考慮して適宜工夫を加え、柔軟で多様な活用を図ることが大切である。

２　学習指導案は、例示である。活用に当たっては、地域社会や児童の実態等を十分考慮して、創意工夫することが大切である。

３　本資料集は、授業で使用する場合、複製して差し支えない。

４　本資料集の資料、学習指導案、授業用ワークシート及び掲示物は、付属のＣＤ－Ｒに収録している。ただし、付属のＣＤ－Ｒを複製・加工することを禁ずる。

目　次

はじめに
本書の構成と活用の仕方
目次

第1部（資料）　第2部（学習指導案）

1年
れんげまつり　だいすき　……4　……指1
てんまで　のびろ　―良寛―　……8　……指3
なみだで　かいた　ねずみの　え　―雪舟―　……12　……指5
2年
町の　たからもの　金ボタル　……16　……指9
ほんみちを　かえろう　―犬養毅―　……20　……指13
日本の　おとうさん　―石井十次―　……24　……指15
3年
まつりまでには　―宮本武蔵―　……28　……指17
わたしたちの後楽園　……32　……指19
がんばれ　カブトガニ　……36　……指23
4年
幸せの黄色い道　―三宅精一―　……40　……指25
蒜山だいこん　……44　……指29
受けつがれる心　―岡崎嘉平太―　……48　……指31
5年
日本女子スポーツの夜明け　―人見絹枝―　……52　……指33
村の人々のために　―山田方谷―　……56　……指35
文化の発展のために　―大原孫三郎―　……60　……指37
6年
鏡獅子　―平櫛田中―　……64　……指41
閑谷学校への願い　―津田永忠―　……68　……指43
種痘で人々の命を　―緒方洪庵―　……72　……指45

作成委員会名簿・協力者

備中国分寺周辺のれんげ畑
（総社市）

れんげまつり　だいすき

「うわあ。おはなの　じゅうたんだ。」
きょうは、れんげまつりの　ひです。
のんちゃんは、かぞく　みんなで
ごじゅうのとうの　みえる　ひろばに
やって　きました。
あおい　そらと　ピンクの　れんげ。
おひさまも　ぽかぽかして　とっても
いいきもちです。

のんちゃんは、おとうとの　ゆうくんと
れんげばたけに　はしって　いきました。

「わたし、はなたばと　かんむりを　つくろうっと。」
ゆうくんは、れんげばたけで　ねっころがったり　ぴょんぴょん
はねたりして　おおよろこびです。
「おかあさんも　なかまに　いれて。」
おかあさんも　にこにこして　います。

「おとうさん、みてみて。れんげの　かんむりだよ。
はい、プレゼント。」
のんちゃんは、りょうてで　れんげのかんむりを
もって　はしって　きました。
「おとうさん、わたし、ここ　だいすき。きれいで
とっても　たのしいもん。」
「そうだね。でもね、ここも　ちょっとまえまでは
たんぼだったんだぞ。」

「じゃあ、いま　どうして　こんなに　いっぱい
れんげが　さいて　いるの。」
のんちゃんは、びっくりして　ききました。
「それはね、まちの　ひとたち　みんなが、もういちど
たんぼを　れんげで　いっぱいに　したいと、
ずっと　がんばって　きたから　なんだよ。
おとうさんたちが　こどもの　ころは、このあたりの
たんぼは、どこも　れんげで　いっぱいだったんだ。
きれいだったし、たのしかったよ。」
「そうよ、だから、ここに　くる　ひとたちのために、おとうさんや
おかあさんも　まちのひとと　いっしょに、たねまきを　したり
れんげの　せわを　したりして、いまでも　がんばって　いるのよ。
もっと　みんなに　よろこんで　ほしくって、ひまわりや　コスモスの
おはなばたけも　つくって　いるのよ。」

のんちゃんは、おとうさんと　おかあさんの　はなしを　きいて、
れんげまつりが　ますます　だいすきに　なりました。

れんげばたけで　たべる　おにぎりは、
さいこうの　あじです。
「そうだ。きょうのこと、ともだちにも
おしえて　あげようっと。こんど
コスモスが　さいたら、また　こようね。」

のんちゃんは　ごじゅうのとうを
みながら　かんがえました。
なんだか　このまちって　すてきだな。

てんまで　のびろ

ー良寛（りょうかん）ー

「おやっ、あれは、なんだろう。」

なつが　ちかづいた　ある　あさのことです。かおを　あらいに　そとに　でた

りょうかんさまは、えんがわの　したを　みて　びっくりしました。えんのしたに

たけのこが、あたまを　だし、ゆかに　とどきそうに　なって　いたからです。

「これは、こまったぞ。」

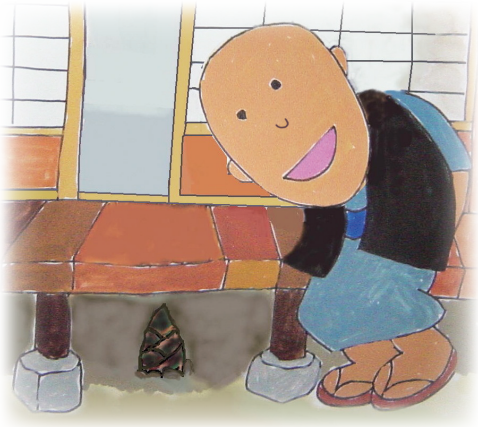
りょうかんさまは、かなづちで　ゆかいたを　はがし、

えんがわに　おおきな　あなを　あけました。あなを

あけて　もらった　たけのこは、ぐんぐん　のびて　いきました。

「おう、これは、げんきな　たけのこじゃ。おおきく　なあれ。」

りょうかんさまは、おおよろこびでした。



それから　とおかほど　たちました。
りょうかんさまは、また　こまって
しまいました。ぐんぐん　のびた　たけのこは、
りょうかんさまより　おおきくなり、やねに
とどきそうに　なったのです。
「これは、こまったぞ。」
りょうかんさまは、いそいで　やまを　おり、
ふもとの　いえに　いきました。
「すまないが、のこぎりを　かして　おくれ。」
いそいで　やまの　おてらに　かえってきた
りょうかんさまは、のこぎりで　やねに
おおきな　あなを　あけました。たけのこは、

あおい　そらに　あたまを　だしました。
「これで　よし。
げんきな　たけのこ
てんまで　のびろ。」
りょうかんさまは、とても
うれしそうでした。
たけのこも　ことりも　こどもたちも、
りょうかんさまには　みんな
たいせつな　ともだちだったのです。

この　りょうかんさまが
じゅうねんあまり　しゅぎょうした
たましまの　えんつうじには、
こどもたちと　たのしく　あそぶ
「わらべ　と　りょうかん」の　ぞうが、
たっています。

「わらべと良寛」の像（倉敷市玉島　円通寺）

なみだで　かいた　ねずみの　え　―　雪舟（せっしゅう）　―

「こら　雪舟（せっしゅう）。また　なまけて　いるのか。ちゃんと　べんきょうを　しなさい。」

ほかの　みんなは　まじめに　おきょうの　べんきょうを　しているのに、雪舟（せっしゅう）だけは、えを　かいて　いました。えを　かくのが　だいすきで、おきょうの　べんきょうを　していても、つい　えを　かいて　しまうのです。

「いくら　いっても　えばかり　かいて、ちっとも　まじめに　とりくまない。このままでは　だめじゃ。しっかり　はんせいしろ！」

おしょうさんは、そういって　雪舟（せっしゅう）を　おおきな　はしらに　しばりつけました。

（まじめに　べんきょうを　しようと　おもうけど、つい　えを　かいてしまう。このままでは　ぼくは、りっぱな　おぼうさんには　なれない…。）

そんなことを　かんがえて　いるうち、雪舟は、かなしくなって　きました。めからは　おおきな　なみだが　あふれ、ぽつぽつと　ゆかに　おちました。やがて、なきつかれた　雪舟が　かおを　あげると、へやの　すみから いっぴきの　ねずみが、こちらを　みて　いました。雪舟は、そのねずみを しばらく　みつめて　いましたが、そのうち　しばられた　ての　かわりに あしの　ゆびを　つかって　じぶんの　なみだで　ゆかに　ねずみの　えを かきはじめました。

あたりは　すっかり　くらく　なりました。おしょうさんが、そろそろ 雪舟を　ゆるしてやろうと、そっと　とを　あけました。すると、雪舟の あしもとに　おおきな　ねずみが　いたのです。

「しっ、しっ、あっちへ　いけ！」

おしょうさんが、どんなに　おいはらっても、ねずみは　にげません。

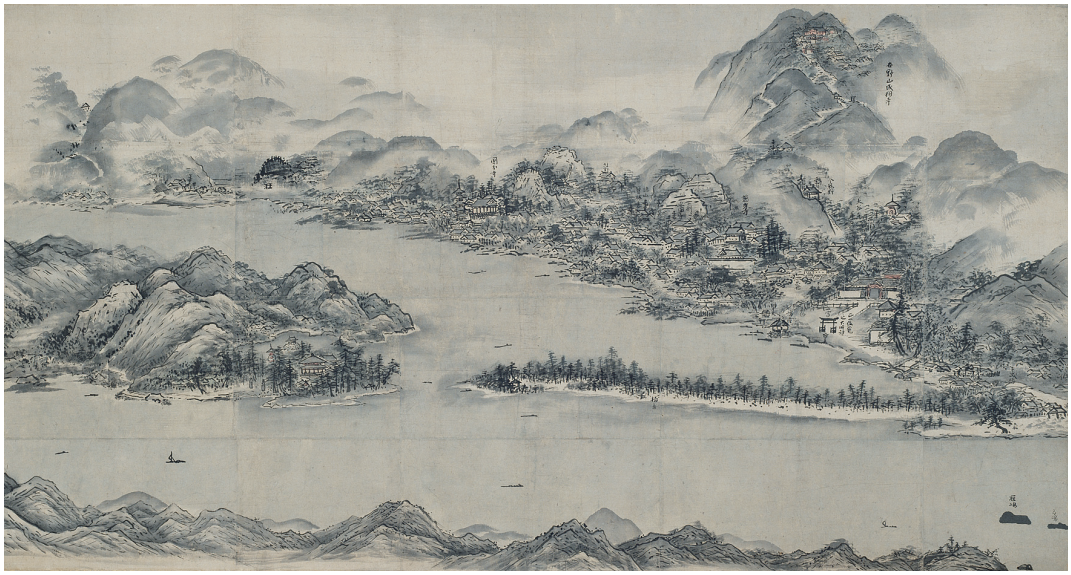
総社市　井山宝福寺所蔵・抜粋

ふしぎに　おもった　おしょうさんが、
ちかくで　よく　みてみると、なんと
それは、雪舟が　なみだで　かいた
ねずみの　え　だったのです。あまりの
えの　うまさに　おしょうさんは、
ほんものと　まちがえたのです。
「そんなに　えが　すきなら、えの
べんきょうを　してみるか。」

おしょうさんが、雪舟に　いいました。
雪舟は、しばらく　だまって　いましたが、
「はい！」
と、おおきな　こえで　こたえました。

それから　雪舟（せっしゅう）は、りっぱな　せんせいに
ついて　えの　べんきょうを　はじめました。
そして、とおく　ちゅうごくに　いき、
えの　べんきょうを　つづけました。
　そのあとも、雪舟（せっしゅう）は、だいすきな　えを
かき　つづけました。そして、ひとの
こころに　ひびく　すばらしい　さくひんを
たくさん　のこしました。

重文　雪舟自画像
藤田美術館所蔵



国宝　天橋立図　雪舟筆　京都国立博物館所蔵

町の　たからもの　金ボタル

林の中を舞う金ボタル（新見市哲多町）　　吉森写真館提供

「わあ、きれい。」
「きらきら　ダイヤモンドのように　ひかっている。」
「うごく　ほう石だあ。」
「シーッ、しずかに。金ボタルが、おどろくよ。」
「金ボタル？」
ここは、岡山県の　新見市哲多町にある
はちまんじんじゃの　けいだいです。
七月はじめの　十日間くらい、金色に
かがやく　金ボタルを　見ることが　できます。

たくやは、お父さんと　いっしょに　じんじゃまで　きました。ほかの県から　きた人の　車も、たくさん　ありました。

「金ボタルが　おどろくと　いけないから、小さな　こえで　はなすよ。金ボタルは、とても　めずらしい　ホタルで、岡山県の　天ねんきねんぶつなんだ。」

「へえ、この町に　すんで　いるのに　はじめて　見たなあ。お父さん、ホタルなのに　どうして　水が　なくても　へいきなの。」

たくやも、小さな　こえで　たずねます。

「ヒメボタルという、りくで　くらす　ホタルなんだよ。ふつうの　ホタルより小さくて　ピカピカ　ひかるのが　はやいんだ。」

お父さんも、小さな　こえで　こたえます。

「ほかの　ホタルと　ちがうんだね。」

「そうだよ。だから、町の人たちで　金ボタルを　大切に　まもって
いるんだよ。むこうに　ある　金ボタルのために　かいた　かんばんを　見て
みようよ。」

みなさん　ホタルを　かわいがって
くださいね。
○　つかまえないで　ください。
○　ライトを　てらさないで　ください。
○　大きな　こえを　出さず、しずかに
　見ましょう。
○　虫よけスプレーは　つかわないで
　ください。

たくやが　かんばんを　見て　いると、
「金ボタルは　町の　たからもの　なんじゃ。」
と、はなしかけて　きたのは、町の人たちで　つくる
ホタルをまもるかいの　おじさんでした。
「ホタルが　みじかい　いのちを　たのしめるように
してやろうと、わしらみたいな　ボランティアも、
がんばっとるんじゃ。道あんないを　したり、みんなで
草かりをしたり　しとるんじゃ。ホームページに
ホタルを　見るための　マナーも　のせとるぞ。」
おじさんの　はなしを　きいて、もう一ど　林の中の
金ボタルを　見に　いきました。シーンと　している
林の中に、いくつもの　いくつもの　小さな　ひかりが、
たからもののように　かがやいて　いました。

ほんみちを　かえろう

―犬養毅（いぬかいつよし）―

「こら、イネが　いたんで　しまうでは　ないか。
あぜみちを　とおらず、ほんみちを　かえれ。」
おじさんが、大きな　こえで　どなりました。田の
イネが、子どもたちに　ふみつぶされて、たくさん
たおれて　います。むちゅうで　バッタとりを
していた　せんじろうたちは、あわてて　ほんみちの
ほうへ　もどって　いきながら、
「ほんみちは、いやだなあ。とおまわりに　なるし、
　虫も　いないし。」
と、ぶつぶつ　もんくを　いいました。

でも、せんじろうは、さっき　おじさんに　しかられた　ことを
かんがえて、とても　わるいことをしたと　おもいました。

それから、しばらく　たった　ある日の　ことです。
「おい、きょうは、だれも　見て　いないぞ。あぜみちを　かえって
バッタを　とろう。」
と、げんたが、さそいました。
せんじろうの目に、ふみつぶされた　イネと　おじさんの　かおが、
うかびました。
げんたは、くみで　いちばん　からだが　大きく、力も　つよいのです。
はんたいすると、どんな　いたずらを　されるか　わかりません。
子どもたちは、げんたに　ついて　あぜみちの　ほうに　いきかけて
います。せんじろうは、立ちどまって　かんがえました。

「ぼくは、ほんみちを　かえるよ。みんなも
かえろう。」
せんじろうは、おもいきって　大きな　こえで
いうと、さっさと　ほんみちの　ほうに
かけだしました。
みんなは、ちょっと　びっくりして　いましたが、
「せんちゃん、まってくれ。ぼくも　ほんみちを
かえる。」
と、いいながら、つぎつぎに　せんじろうの
あとを　おって　いきました。げんたも、
しかたなく　みんなと　いっしょに　ほんみちを
かえりました。

空は、どこまでも　青く　すみきって、ちかくの　いえの　にわには、赤い
ハゲイトウが　かぜに　ゆれて　いました。

犬養毅　　犬養木堂記念館所蔵

せんじろうは、そののち　名まえを
「犬養毅（いぬかいつよし）」と　あらため、そうり大じんと
なって　日本の　ために　はたらきました。
いまも、岡山市北区吉備津（おかやましきたくきびつ）に、犬養毅の
どうぞうが　たてられて　います。

日本の　お父さん　―石井十次―

「あたたかい　おにぎりを　どうぞ。」

十次は、おにぎりを　さしだしました。男の子と　女の子　母親の　三人の　たびの　親子が、おなかを　すかせて　もう　あるけなくなって　いたのです。

そのころ　十次は、ふるさとから　とおく　はなれた　大宮村の　しんりょうじょで、いしゃを　目ざして　はたらいて　いましたが、日々の　生活は　くるしく、いしゃには　なれないかも　しれない　という　ふあんで　いっぱいでした。

しかし、十次は、こまっている　親子を　目のまえに　すると、なにか　しないでは　いられませんでした。おにぎりを　おいしそうに　たべる　親子を　見ると、十次は、なんだか　ほっとするのでした。

そのときです。
母親が、とつぜん　はなしはじめました。
「わたしたちには、かえる　いえが　ありません。
この子たちの　父親も、たびの　途中に　病気で
しんでしまいました。なんとか　ここまで　きたのですが、
この先　二人の　子どもを　つれて　たびを　つづけて
いけそうに　ありません。どうか　定一だけでも
しばらく　あずかって　いただけないでしょうか。」

母親の　ほほには、大つぶの　なみだが　こぼれおちて　いました。
十次には、生きていくために　子どもを　あずけなければ　いけない
母親の　つらい　気もちが　いたいほど　わかりました。十次は、
ことわりきれず、定一を　あずかることに　しました。
しかし　つぎの日、十次は、こうかいしました。一人ぼっちに　なった　定一は、
なきつづけて　います。定一にとって　母親と　はなればなれに　なることは、
こんなにも　つらいこと　だったのです。

ここで　あずかることが、この子に　とって　しあわせだったのだろうか。じぶんが　定一ぐらいの　としには、父親や　母親と　いっしょに　たのしくくらしていたはずだ。なのに、定一は…。そうだ。じぶんが、この子の　父親になろう。

十次は、それからは　父親のような　気もちで、定一と　すごしました。野山を　あるいたり、はたけで　やさいを　そだてたり　しました。

ある日　いけに　つりに　つれていったときのことでした。はじめは　なにも　つれず、いつものかなしい　かおの　定一でしたが、しばらくすると定一の　さおの　先が　うごき、みごと　大きなさかなを　つりあげました。二人は、大ごえでよろこびあい、定一の　かおは、えがおであふれて　いました。

その日の　かえり道の　夕日は、うつくしくまぶしいくらい　かがやいて　いました。

十次の　やさしい　おもいが　つたわったので
しょう。定一の　かおに　いつしか　えがおが
見られるように　なりました。定一の　えがおを
見ていると、十次も、また、しあわせな　気もちに
なり、こころの　中に　力が　わいてくるようでした。
「定一のように　さびしい　おもいを　している
子どもたちが、日本には　まだ、たくさん　いる。
そんな　子どもたちの　ために、じぶんが
できることを　していきたい。」

十次は、そのご、いしゃに　なることを　やめ、せんそうや　さいがいで
おやが　いない　子どもたちを　たくさん　あずかるようになり、
「日本の　お父さん」と　よばれるように　なりました。いまでも　十次の
子どもたちへの　おもいは、いろいろな　人に　うけつがれて　います。

まつりまでには

―宮本武蔵（みやもとむさし）―

もうすぐ、秋まつりがやってきます。毎年、たいこ打（う）ちの力強いたいこの音が、まつりをもりあげます。たけぞうは、いつか自分もまつりでたいこを打ってみたい、と思っていました。そして、同じようにたいこ打ちになりたい友だちといっしょに、たいこの練習（れんしゅう）をはじめました。しかし、なかなかうまく打てません。ばちがよくとぶし、打つ音もばらばらです。友だちの打つたいこの音にも合いません。

（このままでは、だめだ。まつりまでには、なんとかしなくては。）

つぎの日からたけぞうは、雨の日も風の日もうら山へ出かけました。たおれているクリの木をたいこがわりにして、二本のぼうをたたきつけるけいこをはじめました。

「どどどん　どどどん　どどんど　どん。」

と、大声を出しながら打ちつづけました。

なかなかもどってこないたけぞうを心配し、お父さんは弟子たちにようすを見に行かせました。
「なんだ、あの音は。右左で打つ音がばらばらだ。」
「ほんとうだ。」
練習をつづけるたけぞうの耳に、弟子たちの声が聞こえてきました。
（まだ、だめなのか…。）
自分では、右手と左手のたたく強さがそろってきたと思っていたときだったのです。
くちびるをかみしめたたけぞうは、血まめがつぶれて血のにじんだばちをなげ出しました。そして、ふかくためいきをついて、木のかぶにしゃがみこんでしまいました。
「たけぞう、どうしたのだね。」
心配してようすを見に来た姉さんでした。
「姉さん、いくらやっても、うまくできないんだ。」
「だいじょうぶよ。お父さんもわたしも、たけぞうはきっとできると思っているよ。」
「右のばちをおもくして、毎日たたきつづけてもだめなんだ…。」
姉さんは、なげ出されたばちに目をやりながら、
「お父さんが、いつも『なにごとも、努力だ。努力なしでは、何もできんぞ。』と

言っておられるでしょう。ほら、このばちにたけぞうのがんばってきた気もちがつまっているわ。努力をつづければ、かならずできるようになるわ。はじめのころよりはうまくなっているもの。」と、たけぞうの手をやさしくとり、はげましました。

姉さんのことばを聞いたたけぞうは、しばらく、血のにじんだ手のひらを見つめていましたが、やがて、ぐっとにぎりしめました。

（そうだ、ここまで努力をつづけたんだ。姉さんの言う通り、はじめのころよりはうまくなっている。きっとできるようになる。）

たけぞうは、力強い目をして立ち上がりました。そして、なげ出したばちをひろって、またクリの木にむかい、右左の強さに気をつけながら練習をはじめました。

それからのたけぞうは、気もちがくじけそうになると、ばちを見つめ、一人前のたいこ打ちになりたい、という自分の気もちを思い出すようにしました。すると、体の中から力がわいてきて、もう一打ちがんばろう、と思えるのでした。

今日は、村まつりの日です。いさましく力強いたいこの音が聞こえてきます。やぐらの上では、たいこ打ちのゆるしをうけたたけぞうが、すみきった秋空のもと、大きくうでをふりあげていました。たけぞうのたいこの音は、村中にひびきわたります。

ドドドン　ドドドン　ドドンド　ドン　　ドドドン　ドドドン　ドドンド　ドン

「よう、ここまで上手になったなあ。右手のばちさばきもうまいぞ。」

たいこ打ちのなかまたちも、そばにいるみんなも、たけぞうのばちさばきに見とれていました。

（がんばってきてよかった。）

ばちをもつ自分の両手を見ながら、たけぞうはいっそう力強くたいこの音をひびかせるのでした。

このたけぞうこそ、日本一のけんじゅつ家といわれた「宮本武蔵」だったのです。

今、宮本武蔵の生まれた美作市には、「宮本武蔵」の名前のついた駅があります。

宮本武蔵駅（美作市）

わたしたちの後楽園（こうらくえん）

今日は、町たんけんで後楽園に出かける日です。もも子は、うれしくてわくわくしています。

後楽園に入ったとたん、みどりのしばふが目にとびこんできました。

「わあ、きれい。お花がいっぱいさいている。」

広いにわは、赤と白のきれいなサツキがまんかいです。いよいよグループごとのたんけんのはじまりです。もも子たちは、まず、「唯心山（ゆいしんざん）」にのぼりました。岡山城（おかやまじょう）がきれいに見えます。

「ここからのながめは、さいこうね。」

後楽園（岡山市北区）

つぎに、お茶畑（ばたけ）や竹林、ハスの池をまわりました。にわの手入れをしている人に会ったので、

「いつもこんなにきれいにしているのですか。」

と聞いてみました。すると、
「そうだよ。全国からおきゃくさんが来られるからね。だから、心をこめてきれいにして、みなさんに後楽園のすばらしさを知ってほしいと思っているんだよ。」
と、話してくださいました。もも子は、この町に後楽園があることがとてもうれしくなりました。

タンチョウの飼育舎の近くに来ました。
「コォー。コォー。」
タンチョウの鳴き声が聞こえてきます。きれいなタンチョウがたくさんいます。飼育舎の前で「後楽園ボランティア」と書かれたジャンパーをきた人たちが、後楽園とタンチョウについて、おきゃくさんに話をしています。おきゃくさんは感心しながら聞いています。
もも子は、近くにいたボランティアの人に、
「後楽園ボランティアって、どんなお仕事をするのですか。」

ハスの池

と、たずねてみました。その人は、にこにこしながら、話してくださいました。

「わたしたちは、かん光に来た人に後楽園や岡山城のことを分かりやすくお話しているんですよ。」

「へえー。どうして、そんなことをしようと思われたんですか。」

タンチョウ

「わたしは、こんなにすてきな後楽園が大すきだから、いっしょうけんめい勉強しておきゃくさんにお話しできたらいいな、おきゃくさんがよろこんでくださったらいいなと思ってはじめたんですよ。だから、わたしの話を聞いてよろこんでくださるおきゃくさんを見ると、本当にうれしくなります。ほかにも、せいそうボランティアの人がいて、毎回、大ぜいの人たちが後楽園をきれいにしてくれています。家族づれでさんかする人もいますよ。」

「そうなんだ。」

もも子は同じグループのさくらさんと顔を見合わせてにっこりしました。

家に帰ってから、お母さんに今日の町たんけんの話をしました。後楽園には、今まで知らなかったすてきなところがいっぱいあったこと、後楽園ボランティアの人たちがいて、後楽園のことをおきゃくさんにせつめいしていたこと、もっともっとグループの友だちと後楽園のすてきなところや、後楽園ボランティアの人の仕事についてしらべてみたくなったことなど、いっきに話しました。

「そういえば近所の中村さんも、後楽園ボランティアをしているはずよ。『こんど、タンチョウの園内さんさくがあるから見においで。』って、さそわれたわ。」

お母さんのことばに、もも子はびっくりしました。家の近くにも後楽園のためにがんばっている人がいるのです。もも子は、中村さんに会って話を聞いてみたくなりました。さくらさんをさそって、こんど、後楽園のイベントに行ってみようと思いました。そして、しらべて分かったことを、たくさんの人につたえたいなと思いました。

がんばれ　カブトガニ

カブニくんは、笠岡市にあるカブトガニ博物館のマスコットキャラクターです。カブトガニのまんじゅうや、せんべいなどのおみやげもでき、今では、「笠岡といえばカブトガニ」と言われるほどの人気ものカブトガニ。そんなカブトガニが、笠岡の海から一ぴきもいなくなるかもしれないと心配されたときがあったのです。

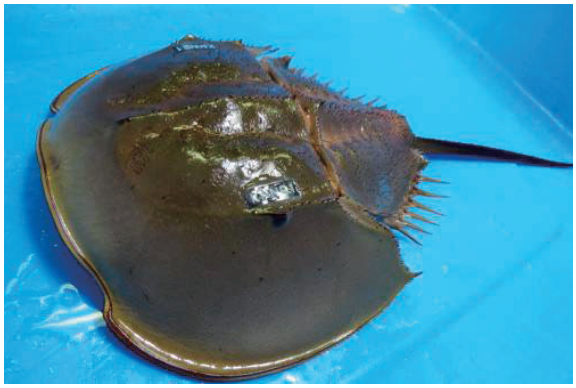
カブトガニ博物館マスコットキャラクター
カブニ くん

カブニくんと家族

昭和三十年代まで、笠岡の海にはたくさんのカブトガニがすんでいました。そのころ、カブトガニは、あみをやぶる海のギャングとしてじゃまものあつかいされていました。カブトガニをたすけようものなら、悪口を言われたり、わらわれたりしたのです。しだいに、カブトガニの数はへっていきました。

笠岡市立カブトガニ博物館

カブトガニのたまご



カブトガニ

さらに、昭和四十年代に入ると笠岡湾の干拓が行われ、カブトガニのすみかがうばわれ、見る見るうちにカブトガニの数はへっていったのです。このようすを知った笠岡市の中学校の先生や生徒たちは、

「このままでは、カブトガニのすむ場所がなくなり、一ぴきもいなくなってしまう。なんとかしなくては…。」

「ぼくたちが、カブトガニをたすけよう。」

と、『ほご少年団』をつくり、いっしょうけんめいにカブトガニをまもるうんどうをはじめました。

カブトガニは、あつい夏の星のきらめく真夜中にだけ、しずまりかえった海の沖合から、オスとメスでいきをひそめるようにすなはまへやってきます。そして、たまごをうみ、ぶじにうめたことを見とどけると、つかれた体を引きずるようにして海へ帰っていくのです。たまごの大きさはすなつぶくらいで、しんじゅのようにうつくしく、そのかがやきは、地球のれきしをそっと教えてくれているようです。

活動する保護少年団

笠岡湾にしめきりていぼうができると、少年団の人たちは、カブトガニのたまごや親を、近くの海へ引っこしさせました。たまごはつぶれやすいので、くぼみよりはなれたところから少しずつすなをくずし、たからものようにしんちょうにほっていきました。この一つぶに、二億年ものいのちがうけつがれているのかと思うと、むねがジーンとしてきます。

朝、くらいうちからはまべへ出かけて、魚のえさになるゴカイや貝をほりに来た人たちに、たまごをあらさないようにたのんで回りました。広いすなはまのことですから、たいへんなしごとでした。一ぴきのカブトガニものこさないようにと、みんな体中どろんこになって、たまごや親をひっしでさがし回りました。

この少年団のかつどうに心をうたれ、カブトガニの大切さを知った人たちは、それぞれの地域でカブトガニをまもるかつどうをはじめました。そして、そのかつどうの輪はどんどん大きくなって全国に広がりました。

その後、笠岡市には、「カブトガニほごセンター」ができ、平成二年には、「カブトガニ博物館」となりました。「カブトガニ博物館」では、たまごをかえらせたり、プールでカブトガニをそだてたりして笠岡の海にはなしています。また、下水道の整備をしたり、海水をきれいにする船を出したりして、海をきれいにするかつどうも行われました。さらに、海草を海にそだてて、魚やカブトガニがすみやすい海にする努力も行われました。そのおかげで、笠岡の海で生きるカブトガニは年々ふえてきています。

少年団や多くの人々のねがいをうけつぎ、今では、カブトガニをまもるためのイベントがひらかれたり、カブトガニがすむ海のごみひろいをしたりするなどのかつどうが行われ、県外からも多くの人がさんかしています。

カブトガニが安心してすめるうつくしい海をのこそうと、かつどうの輪が、ますます広がってきているのです。

※干拓…あさい海やひがたをしきり、水をぬきとったり、ひ上がらせたりして、陸地にすること。

※教材中の写真は、笠岡市立カブトガニ博物館提供